HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「感情移入」と「自己移入」：現象学・解釈学における他者認識の理論 (2) シェーラーの他者論 (前)
Author(s)	石原, 孝二
Citation	北海道大學文學部紀要, 48(2), 1-14
Issue Date	1999-11-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33752
Type	bulletin (article)
File Information	48(2)_PL1-14.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 48-2 (1999)

「感情移入」と「自己移入」── 現象学・解釈学における他者認識の理論 (2)シェーラーの他者論(前)

石 原 孝 二

──目　次──

はじめに
1，概観
2，「感情移入」の概念史
a)「感情移入美学」
b) 類推説とリップスの感情移入論(以上前号)
3，シェーラーの他者論
a) 錯誤の構造(本号)

3，シェーラーの他者論

前節で見てきたように,「感情移入」の概念は,18世紀のドイツロマン主義において多用された「(対象のうちに)自己を感じ入れる」(sich hineinfühlen)という表現が,感情移入美学において,美的経験における生理的・心理的メカニズムを示す概念として捉え直されたことによって成立した概念である。ドイツロマン主義においても,また感情移入美学においても,〈感情移入〉という現象は,人間が対象(自然・他者)の内に自我を移入することによって,共感や快を感じることとして捉えられていた。このような〈感情移入〉においては,自己の身体を媒介として,〈内〉なる心もしくは自我と,〈外〉なる対象との間に調和的・融合的な関係がうちたてられることになる。ヘルダー

においては，身体は，世界の象徴であるとともに，心（Seele）の諸能力の比物であるとされ，人間はこの身体を通じて与えられる感覚の内に精神的な自我を読み込んでいくことによって「対象の内へと自己を深く感じ入れる」ことができるとされる（Herder 1774）。他方，R.フィッシャーらの感情移入美学は，対象の内に精神的な内容を投入することによって美的な経験が生じるとし，また，対象の構造と人間の身体的構造との間の「類似性」の内に，対象と主体との間の「調和」の根拠を求めている（R. Vischer 1873）。

感情移入に関する「類推説」を否定し，代わりに〈模倣本能説〉を提示したリップスも，自我の対象との間に，融合的な関係を見ることにおいては変わらない。リップスに従うならば，われわれが対象を美しいと感じるのは，「内的な模倣」において，対象の内に自己自身の活動性を感じるからであり，われわれが他者の情動を認知することができるのは，他者の身体的運動・表情によって呼び覚まされた自己の過去の情動を，他者の身体的運動・表情のうちに移し入れることによってなのである（Lipps 1903; 1907）。

このような感情移入説は，整理するならば，以下の二つの前提によって成り立っていることになるだろう。

①心もしくは自我は，内的かつ確実に与えられるものであり，それは外的かつ不確実に知覚される対象とは区別されるものである。

②外的に与えられる感覚の内に自我が自己自身を投入し，自我が対象と融合することによって，美的な経験もしくは他者の認知が得られる。逆に言えば，そうした融合を可能にするものが美的な対象もしくは他者の身体である。

シェーラーは1913年の「共感」論（Scheler 1913）他で，この二つの前提を否定することによって，感情移入説を批判した。このシェーラーの感情移入説批判は，ハイデガーやカッシーラー（Heidegger 1927; Cassirer 1929）にも受け継がれたものであり，1910年代および20年代におけるドイツ哲学の思想史的な転換点の一つを形成したものと見ることができる。ここでは，シェーラーの感情移入説批判の思想史的な位置づけを確認しながら，シェー

ラーの他者論について見ていくことにしよう。

a）錯誤の構造

内的知覚と外的知覚

感情移入説の第一の前提，すなわち，心は内的に与えられ，外的な感覚とは区別されるという前提は，デカルトの，思惟作用(intellectio＝精神が自己自身へと向かう作用）と想像作用（imaginatio＝精神が物体［corpus］へと向かう作用）との区別（Descartes 1647）や，ロックの，「感覚」（sensation）と「反省」（reflection）の区別（Locke 1690）等を源流として，20 世紀初頭まで，哲学や心理学において主要な基準枠であり続けた前提である。特に 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのドイツでは，内的知覚(innere Wahrnehmung）と外的知覚（äußere Wahrnehmung）の区分に基づいて，自然科学と心理学ないしは精神科学の方法論を基礎づけようとする傾向が一般的であった。例えば，ブレンターノは内的知覚において与えられる現象を心理的（psychisch）な現象，外的知覚に与えられる現象を物理的（physisch）な現象とし，それぞれを心理学と自然科学の対象と考え，ディルタイは，「内的経験」の領野を，自然科学に対する精神科学固有の領野と見なしていた（Brentano 1874: 109ff.; Dilthey 1883: 4ff.)。

他者認識に関する類推説や感情移入説は，こうした内的知覚と外的知覚の区別という基準枠に従う限り，必然的に帰結する考え方であり，逆に言えば，類推説・感情移入説を論駁することは，この基準枠を解体することを意味することになる。後に見るように，シェーラーはこの解体を，内的知覚の特権性を否認するという仕方で行ったが，最初に内的知覚の特権性を否定し，シェーラーの感情移入説批判の議論の枠組みを用意したのはフッサールの『論理学研究』第二巻（Husserl 1901a; 1901b）である。

フッサールは，『論理学研究』第二巻の補遺「外的知覚と内的知覚。物理的現象と心理的現象」で，ブレンターノの内的知覚と外的知覚の区別に関する考え方を批判している。そこでフッサールは，内的知覚を心理的現象に，外的知覚を物理的現象に割り当てた上で内的知覚を「疑い得ない」（untrüglich）

ものとするブレンターノに対し，「心理的現象も誤って知覚されうる」(Husserl 1901b: A704) とし，内的知覚と外的知覚の差異が，明証的知覚と非明証的知覚という差異であるわけではない，と主張する。内的知覚が自我に関係づけられる心理状態の知覚を意味し，外的知覚が物理的な現象の知覚を意味するとすれば，それらは，ともに誤りうるのであって，そこに明証性の度合いの違いがあるわけではない。それ故にフッサールは，明証的知覚と非明証的知覚との間の区分線を，心理的現象についての知覚と物理的現象についての知覚との間から引き剝がして，明証的知覚と非明証的知覚の区別に対応しうる新たな区別を立てようとする。そのような区別としてフッサールが提示したのが，「十全的 (adäquat) な知覚」と「非十全的な知覚」の区別である。十全的な知覚とは，「われわれの意識のレアルな成素(reale Bestandstücke)」ないしは「そのつど現存する体験そのもの」の知覚であり，他方，非十全的な知覚とは，われわれの体験を通して「現出する (erscheinen) 対象」へと向かう知覚(1928年の第二版で捕捉された表現を使うならば，「超越的なもの」[Transzendentes] を「構成する」知覚) である。十全的な知覚は，当の知覚にとって現に与えられている内容のみに関係するが故に明証的で，確実であるのに対して，非十全的な知覚は，現に与えられた内容を超えて，対象へと向かうが故に非明証的であり，不確実である。その際，知覚が向かう対象が物理的なものであるか心理的なものであるかは問題ではなく，実際に体験されている感覚内容を何らかの対象として「解釈」ないしは「統覚する」(apperzipieren) [1] 限りにおいて，その知覚は非十全的であり，不確実である。われわれは，物理的現象の知覚に関して誤りうるのと同様に，自分自身の「不安」や「歯の痛み」等の知覚に関して誤りうるのである。

フッサールのこうした批判は，本来，ブレンターノの心理的現象—物理的現象という区別を，体験そのものと体験を通して現出してくる対象との区別に置き換えることによって，ブレンターノの「志向」概念を改訂することを目的としたものであり，類推説や感情移入説に対する批判を視野に入れてなされたものではない。しかし，フッサールの議論は，他者の心は直接知り得ないが自分の心は直接知ることができる，という類推説と感情移入説に共通

する前提への否認を含意している。

錯誤と誤謬

シェーラーは,「自己認識の偶像」(Scheler 1915)で,以上のようなフッサールの議論の含意を捉え，フッサールの議論の枠組みを感情移入説に対する批判のための土台として利用している。

シェーラーのこの論文は,内的知覚において与えられる「心的過程」(seelischer Vorgang）もしくは「心理的対象」に関するわれわれの錯誤の本質を明らかにしようとしたものである。「内的知覚の錯誤」を解明するという姿勢は,内的知覚は確実であるという捉え方を否定するものであり，フッサールのブレンターノに対する批判の方向を受け継いでいる（cf. Scheler 1915: 246)。シェーラーはこの錯誤の解明によって,「デカルトに由来する」自己確実性のドグマを除去するとともに，感情移入の現象を，錯誤の一種として位置づけることを試みるのである。

シェーラーはまず，錯誤（Täuschung）と誤謬（Irrtum）を区別することから議論を始める。シェーラーの例に従って，水をはった容器に一本の棒が入れられていて，それを斜め上から見ているという場面を想定してみよう。棒は〈実際には〉まっぐなものとする。棒は水面を境にして，明らかに折れ曲がっているように見える。この際,「折れ曲がった棒が現象しているというだけでは，まだ錯誤ではない。錯誤はむしろ，私の前に現象している，折れ曲がっているという事態を，棒の〈現実の〉実在的な性質と見なすことにある。」(Scheler 1915: 223）それ故に，錯誤とは，ある事態が，その事態が属している「存在の層」よりも「より深い存在の層」に関係づけられる際の誤りによって生じる誤りに他ならない。〈折れ曲がった棒〉という〈見え〉を，あくまでも〈見え〉のレベルで捉えている限り，そこに錯誤の成立する余地はない。錯誤は，この〈見え〉が,「物的な実在」(dinglich reales Dasein）と結びつけられることによって可能になるのである。他方,「誤謬」とは,「判断において指示されている事態と直観において存立している事態との間に成立する」ものである。例えば，濡れた路面を目の当たりにして,「雨が降った」

と判断するならば，そこに誤謬の余地が入り込むことになる（実際には，誰かが水をまいたのかも知れない）。ここでの誤りの可能性は，知覚されている事態（濡れた路面）そのものには関係しない。この知覚された事態が別の事態を指し示していると判断することによって誤謬の可能性が入り込むのである。

内的知覚における錯誤の構造

「誤謬」との対比のもと「外的知覚」についてなされたシェーラーのこの「錯誤」の規定が，フッサールの「体験」と「現出する対象」の区別を踏まえていることは言うまでもない。もし，ここでのシェーラーの錯誤の規定を「内的知覚の錯誤」にそのまま当てはめて良いのだとすれば，内的知覚において，外的知覚の〈見え〉と「物的な実在」，もしくは「体験」と「現出する対象」の対に当たるものは，「体験」と「心理的対象」――感情，思想など――の対であることになるだろう。

ところで，シェーラーは，外的感覚器官（äußerer Sinn）と内的感覚器官（innerer Sinn）を対比させた上で次のように言う。「体験と内的知覚の間に，生にとって重要なもの（Lebenswichtiges）の分析器としての役割を果たす〈内的感覚器官〉が介在しているという事実に基づいてこそ，〈内的知覚の錯誤〉といったものが存在するのである。」（246）しかし，この内的感覚器官と外的感覚器官の区分は，「内的知覚の作用は，……自我のすべての体験に関わる」（242）という規定とともに，ミスリーディングであろう。もし内的感覚器官と外的感覚器官が，それぞれ，例えば，メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty 1962）の言うような「内受容性」と「外受容性」に対応するものと考えるとすれば，それぞれがもたらす感覚は，あらかじめそれぞれの独自の領域をもったものであることになろう。また，内的知覚は自我のすべての体験に関わる，という規定は，フッサールの『イデーンⅠ』での，さしあたりは孤立していて，「感情移入」によってはじめて他者と交わる自己の「体験流」（cf. Husserl 1913: 11, 77ff.）のようなものを思い起こさせる。実際，以下で見るように，シェーラーは「体験の流れ」という表現を使っている。しかし，シェーラー

の意図はむしろ，①内的知覚によって知覚される（フッサール的に言えば，「統覚」される）心理的対象は，感覚器官の違いによって物理的現象と異なるわけではないこと，また，②内的知覚が関わる体験流は，自己の心理的過程だけでなく，他者の心理的過程をも知覚対象とすることができることを示すことにあるはずであり，この二つのことを示すことが，感情移入説の前提を否定することになるはずである。

次の引用文は，第一の点についての，シェーラーの意図をよく表している。

> 「心理的なもの」の統一は，「内的知覚」と呼ばれる，われわれがそれを知覚する特殊な仕方へと眼差しを向けることによってしか把握できない。従って内的知覚は，内的知覚から独立に，定義によってすでに確定された，諸対象の類的な統一としての「心理的なもの」を知覚するわけではない。…この二つの知覚の方向の区別は，いかなる意味においても身体に，従ってまた，感覚機能と感覚器官（Sinnesorgane）とに相関的なものと見なされてはならない。(Scheler 1915: 237, 241)

シェーラーのこの規定は，心理的現象と物理的現象の区分が感覚器官の区分に対応するものではなく，むしろ知覚の「仕方」に対応するものであることを主張する。この規定に従うならば，他者の心理的過程は，他者の身体の視覚像に自己の過去の心理的過程を投射するという仕方で理解される，という感情移入説の想定は根拠のないものとなる。というのも，他者の身体の視覚像という「所与」は，それ自体では，物理的な現象として把握されることを要求しているわけではなく，それが心理的な現象として把握されるか物理的な現象として把握されるかは，知覚の「仕方」に依存するからである。私は，他者の顔面の変化を，物理的な現象―血流の変化等―として捉えることもできるし，あるいは，その変化を「羞恥」として知覚することもできる。それゆえに，もしわれわれが自己の内受容的な感覚器官がもたらす感覚をもとに，自己の心理的過程を直接知覚することができるのであれば，同様に，視神経がもたらす他者の視覚像をもとに，他者の心理的過程を直接知覚することができるはずなのである。

第二の点についての，シェーラーの「共感」論文での以下のような主張は，以上のことを踏まえてはじめて可能となるものだろう。

（ある個人の）内的直観の作用は，自分の心的過程（Seelenvorgänge）のみならず，その権能と可能性から言えば，さしあたりまだ分節されていない体験の流れとして，実在する心の領域全体を包括している。そして，われわれが，あらかじめ，われわれの時間的な体験を背景にして，われわれの現在の自己（Gegenwartsich）を把握するのと同様に，われわれは，ますます不明瞭になっていきながらすべてを包括する意識を背景として，自分の自我を把握するのであり，この意識の内には，すべての他者の自我存在と体験もまた，原理的に「に含まれている」ものとして与えられているのである。（Scheler 1913: 244）

〈私〉の体験流が，自分自身の体験のみならず，すべての他者の体験をも包括するというシェーラーのこの考え方は，「形而上学的仮説」（Schutz 1942: 165）とも評されたものだが，熊野（熊野 1987）も指摘するように，この文言が，前人称的な体験の流れの中から，個々の体験を自己と他者に帰属させていくプロセスについて述べているのだとすれば，それほど「形而上学的」なものではない。

私の体験流の中に，他者の体験もが含まれていると言うとき，それは，他者の内受容的感覚さえもが同時に知覚されていることを意味しているわけではない。私は，他者の〈微笑み〉の内に他者の〈喜び〉を知覚するが，そのとき，他者の頬筋の収縮を同時に感じているわけではない。「われわれが他者知覚を通じて決して〈知覚〉することができないものは，他者が体験している身体の状態，とりわけ，身体器官の感覚とそれに結びついた感性的な感情だけである。」（Scheler 1913: 249）

もし内的知覚が，他者の身体の視覚像その他を通じて他者の心理的過程を，また，自己の内受容的感覚を通じて自己自身の心理的過程を「直接」把握することができるのだとすると，内的知覚における錯誤とは，外受容的ないし内受容的に与えられた「所与」と実際の心理的過程（シェーラーはこれを「実在的［real］体験」と呼ぶ）とを関係づける際の誤りということになるだろう。

錯誤としての感情移入

この錯誤の構造を踏まえて，シェーラーがどのように感情移入の現象を錯

誤として捉えていたかを見ていくことにしよう。「自己認識の偶像」で実際に取り上げられている内的知覚の錯誤の例を，シェーラーの記述の仕方を無視して，事柄に沿って整理するならば，三種類の錯誤を考えることができるように思われる。一つは，心理的過程の内容に関する錯誤であり，もう一つは，心理的過程の帰属先に関する錯誤，そして最後に，心理的現象を物理的現象と，あるいは逆に，物理的現象を心理的現象と取り違える，領域に関する錯誤である。このように整理してみると，シェーラーの記述は，第一の種類の誤りに関しては問題ないが，第二・第三の種類の誤りに関しては，混乱しているように思われる。この混乱は，先に述べた，内的感覚器官の問題に連動しているものであり，シェーラー自身が示した方向性，つまり，内的知覚に固有の錯誤を解明するとともに，内的知覚が他者の体験をも把握しうることを示すという方向性を貫徹する際の障害となっている。

第一の種類の，心理的過程の内容に関する錯誤の例としてシェーラーが挙げるのは，「利害による連帯」を「愛」と錯覚する場合や，逆に，自己が抱いている感情を抑圧し，「そうした感情を自分に認めない」場合である（Scheler 1915: 277f.）。われわれが他者の表情・振る舞いにおいて表出する他者の感情を読み誤りうるならば，同様に，われわれは自己自身の心理的過程について誤りうるのである。

第二の類型の錯誤は，他者の心理的過程を自己のものと取り違える錯誤，あるいは逆に，自己の心理的過程を他者のものと取り違える錯誤である。ここには，「自己の体験の図式の中で他者を受け入れ，他者を変容する」（254）投射の傾向と，逆に，他者の体験を自己の内に引き入れる傾向が含まれる。これらの錯誤は，自己の心理的過程の他者への，あるいは他者の心理的過程の自己への〈感情移入〉に他ならない。注目されるのは，シェーラーが，自己の感情を他者に帰属させる錯誤よりも，他者の心理的過程を自己のものと取り違える錯誤の方が〈より先〉であるとしていることである。「恋をした若い娘は，彼女の体験をイゾルデやジュリエットの中に感情移入するのではなく，むしろ，こうした小説の登場人物の感情を，彼女の狭い体験の内へと感情移入する。」（Scheler 1915: 266）ある共同体の中に生きるわれわれは，そ

の共同体の背負う伝統や「環境世界」が織りなす「感情の方向」にそって，共同体の成員の体験や感情を自己の内に取り込んでいる。そうしたわれわれにとっては，「自分がまず体験したことだけを理解することができる」[2)]のではなく，むしろ逆に，「自分の体験は，共同行為，追感覚，追感情に基づく他者の体験によって，さしあたり，内的知覚には完全に隠蔽されている。そうした他者の体験は，錯誤によって，さしあたり〈自分のもの〉としてわれわれに与えられているのである。」シェーラーのこうした考え方は，〈自己から他者への〉感情移入よりも〈他者から自己への〉感情移入の方が〈より先〉であることを指摘することによって，〈自己から他者への〉感情移入を他者認識の〈起源〉としてとして説明する説が成り立たないことを示すとともに，感情移入が自他認識の錯誤であることを指摘することによって，そもそも感情移入という現象が，真正の他者認識ではあり得ないことを示すものである。

ところで，シェーラーは，この第二の種類の錯誤に関して次のようにも述べる。

> 内的知覚の，一般的な錯誤の第一の源泉は，外的知覚に由来する事実を，内的知覚の内容の中に，また，他者知覚に由来する事実を，自己知覚の内容の中に誤って置き入れるということにある。(Scheler 1915: 266)

ここでシェーラーは第三の種類の錯誤，つまり，心理的現象と物理的現象の取り違えについて触れ，それを，第二の種類の錯誤，つまり，体験の帰属における取り違えと関連づけている。この箇所は先のイゾルデとジュリエットの例に続く段落であり，この引用文から遡れば，先の例は，年端のいかない少女が，読書という外的知覚を経由して得られたものを，心理的な経過の内に組み入れることによって，他者の（この場合は虚構の人物の）体験を，自己の体験の内に組み込んでいく例であることになる。しかし，この第二の種類の錯誤と第三の種類の錯誤の交錯は，ここでシェーラー自身がある種の〈錯誤〉に陥っていることを示していよう。この〈錯誤〉は，内的知覚における固有の錯誤と，心理的なものの知覚を説明する際の，領域的・認識論的な錯誤との取り違えである。もし，「物理的なものは外的直観においてのみ，心理的なものは，内的直観においてのみ，現象する」(237) のだとすれば，内

的知覚の錯誤は，内的知覚の側だけで，語り得るのでなければならない。内的知覚は感覚内容に依存しないというシェーラーの規定は，他者の身体の視覚像等を介して得られた他者知覚を，内的知覚の作用として捉えることを可能にし，また逆に，視感覚器官等をつうじて得られた知覚を自動的に外的知覚と見なすことを禁止したはずである。他者の身体の視覚像や，共同体の伝統，様々なジャンルのテクスト等を介して他者の体験が自己の中に入り込んでくる過程を，外的知覚を通して得られたものが内的知覚の中へと組み込まれていく過程としてとらえることは，他者の心理的過程を「直接」知覚することができる（279），とするシェーラー自身の主張と相容れないものであろう。このシェーラーの主張に従うならば，われわれの内的知覚は，他者の身体の視覚像や，テクスト等[3]を介して，他者の心理的過程を理解することができるはずである。

他方，第三の種類の錯誤，つまり内的知覚と外的知覚，心理的現象と物理的現象との間の錯誤そのものに目を転じるならば，まず第一に，本来生のない自然対象に，自己の感情を投影する，ドイツロマン主義や感情移入美学で言われた〈感情移入〉や，逆に，物理的な現象を心理的世界の内に転用する傾向が例として挙げられる(257)。後者の傾向には，「高価な料理を供されたり高額な指輪を贈られると喜ぶ」ことに見られるような，「物や状況について感じとられた……価値性質を，自分の自我状態の感情領域へと置き入れること」(262)や，あるいは，例えば，部屋を出ようとする際に，「ドアに向かって歩く」や「ノブを押す」といった物理的現象―自己の身体運動のディテール―への拘泥が部屋を出ようとする意欲にとって代わって，なかなか部屋を出ることができない病的な状態（258）などが含まれる。そして，第二に，とりわけ，内的知覚と外的知覚との間の錯誤の例としては，心理的過程の理解の過程を，物理的現象の理解の過程によって説明しようとする，認識論的な誤りが挙げられる。われわれが他者の表出運動を，〈怒り〉や〈喜び〉等の表現として理解する過程は，内的知覚の作用によって支えられている。もしそれを他者の身体像の変化や筋肉組織の動きとして記述するならば，その時点ですでに，われわれの態度は外的知覚に切り替わっているのであり，そうし

た記述は〈怒り〉や〈喜び〉そのものの記述ではあり得ない。他者理解に際して，われわれには「さしあたり」他者の身体や，他者が発した音響という物理的な現象が与えられ，この物理的な現象に自己の心理的な過程が投入されると説明する感情移入説や，この物理的な現象を手がかりに推論が行われると説明する類推説は，この種類の錯誤を犯していることになるだろう[4)]。

個々の体験の自他への帰属の際の錯誤を，内的知覚と外的知覚との交錯としてではなく，あくまでも内的知覚における錯誤として捉えるならば，逆に，錯誤することなく，体験を自他に帰属させるプロセスの特性も明らかになってくるはずである。また，このプロセスを追跡することによって，最初に挙げた感情移入説の第二の前提に対するシェーラーの批判の要点が浮かび上がってくるだろう。以下では，それらの点について考察することにしよう。

1）この補遺の，第一版での「解釈」(Interpretation)，「解釈する」(interpretieren) という表現は，第二版では一貫して，「統覚」(Apperzeption)，「統覚する」(apperzipieren) という表現に置き換えられている。この書き換えを，フッサールの，「脱人格化の傾向」による意図的な書き換えとする見方（Sawick 1997: 98）もあるが，この改訂はむしろ，単に本文での言葉遣い（Husserl 1901a: B385f.）に合わせたものであろう。

2）Scheler 1915: 285.　このテーゼは，リップスの感情移入説（Lipps 1907）からの必然的な帰結である。ディルタイもまた遺稿で次のように述べる。「自分が体験したことのない感情は他者の内に再び見いだすことはできない。」(Dilthey 1927: 196)

3）シェーラーは，他者理解の際に，身体的な現前が必要であるとは考えていない。「ある個人の実在を知るために，その個人の身体（Körper）について知る必要はない。われわれに，その個人の精神的な活動性の何らかの印と痕跡が与えられていれば，……われわれはすぐに，個人の活動的な自我を把握するのである。」(Scheler 1913: 236)

4）上に述べたように，他者の心理的過程を自己の内に取り込む〈感情移入〉を，外的な知覚に由来する事実を内的知覚の内容の内に取り込むこととするシェーラー自身も，その限りにおいて，同じ錯誤を犯している。

文献表

Brentano, Franz

1874 *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. 1, hrsg. v. Oskar Kraus, Hamburg 1924/1973

Cassirer, Ernst

1929 *Philosophie der Symbolischen Formen*, 3.Teil, *Phänomenologie der Erkenntnis*, 1929, 2.Aufl., 1954

Descartes René

1647 *Meditationes de Prima Philosophia*, Texte latin et traduction de Duc de Luynes, Introduction et Notes par Geneviève Rodis-Lewis, Paris 1978

Dilthey, Wilhelm

1883 *Einleitung in die Geisteswissenschaften*, in: *Gesammelte Schriften*, Bd. 1, Göttingen 1959/1990

1927 "Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften", in: *Gesammelte Schriften*, Bd. 7, Leipzig/Berlin 1927

Heidegger, Martin

1927 *Sein und Zeit*, Tübingen 1927, 16.Aufl., 1986

Herder, Johann Gottfried

1774 "Übers Erkennen und Empfinden in der menschlichen Seele 1774", in: *Sämtliche Werke*, Bd. VIII, Hildesheim/New York, Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Berlin 1892

Husserl, Edmund

1901a *Logische Untersuchungen*, Bd. 2, Teil I, *Gesammelte Schriften*, Bd. 3, Text nach Husserliana XIX/1, hrsg. v. Elisabeth Ströker, Hamburg 1992（頁数の前のA，Bはそれぞれ，初版と第二版の頁付を示す）

1901b *Logische Untersuchungen*, Bd. 2, Teil II, *Gesammelte Schriften*, Bd. 4, Text nach Husserliana XIX/2, hrsg. v. Elisabeth Ströker, Hamburg 1992（頁数の前のA，Bはそれぞれ，初版と第二版の頁付を示す）

1913 *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, 1. Buch: *Husserliana* Bd. III/1, hrsg. v. Karl Schuhmann, Den Haag 1976

熊野純彦

1987「《共感》の現象学・序説　シェーラーの他者理論によせて」（『現代思想』1987年6月号）

Lipps, Theodor

1903 "Einfühlung, innere Nachahmung und Organempfindungen", in: *Airhiv fü, die Gesamte Psychologie*, Bd. 1, Leipzig 1903

1907 "Das Wissen von fremden Ichen", in: *Psychologische Untersuchungen*, Bd. 1, Leipzig 1907

Locke, John

1690 *An Essay Concerning Human Understanding*, edited with an introduction by John W. Yolton, London 1947/1971

Merleau-Ponty, Maurice

1962 *Les relations acec autrui chez l'enfant: Les cours de Sorbonne*, Paris 1962/1969

Sawicki, Marianne

1997 *Body, Text, and Science* (Phaenomenologica 144), Dordrecht/Boston/London 1997

Scheler, Max

1913 *Wesen und Formen der Sympathie*, 6. durchgesehene Auflage von "Phänomenologie und Theorie der Sympathiegefühle" in: *Gemammelte Werke*, Bd. 7. hrsg. v. Manfred S. Frings, Bern/München 1973

1915 "Die Idole der Selbsterkenntnis", in: *Vom Umsturz der Werte: Gesammelte Werke*, Bd. 3, hrsg. v. Maria Scheler, Bern/München 1955/1972

Schutz, Alfred

1942 "Scheler's Theory of Intersubjectivity and the General Thesis of the Alter Ego", in: *Collected Papers I*, edit. by Maurice Natanson, The Hague 1971

Visher, Robert

1873 *Über das optische Formgefühl. Ein Beitrag zur Ästhetik*, Leipzig 1873, in: *Drei Schriften zum Ästhetischen Formproblem*, Halle/Saale 1927